

CTP User Report 2

フルCTP化がもたらす高品質と安定性

さしゅう
丸勝印刷(株)
■所在地: 広島県広島市西区商工センター7-5-8
■社員数: 40名

■使用機種: 大日本スクリーン製造(株) Plate Rite 1080
■使用版材: 三菱化学(株) ダイヤモンドプレートLA-2 (高感度フォトリソ)

丸勝印刷は本社を広島に置く従業員約40名の中堅印刷所である。印刷工業団地の一角に位置する同社は約2年半程前までは、デザイン、DTPなどを外注に頼る製版、印刷を主体とした旧来形態の印刷会社であった。しかし、経営環境が徐々に厳しくなるなか、従来の業務形態では生き残りが難しいと判断した結果、前工程のデジタル化とフルCTP化に着手し、現在ではデジタル化に成功した印刷企業のひとつとして名を馳せるまでになったと言っても過言ではないだろう。デジタル化、フルCTP化への移行は一体どのように行われたのか。

「私がここへ戻ってきたのが約2年半前のことなんです、それまでは東京の印刷会社で営業を経験してまして、そ



CTP化の中心人物となったシステム課久保知久氏

の時から弊社のデジタル化対応の必要性を強く感じていました。というのも、弊社の仕事の約40%、売り上げベースで見ると約50%は東京のクライアントが占めており、地元である広島近郊のクライアントからの受注内容に比べるとデジタル化への対応は仕事上不可欠になりつつあったわけです」と語るのは、デジタル化対応への中心人物となったシステム課の久保知久氏である。

「デジタル化に着手するならば一気に進めなければだめだ」という信念を元に約半年をかけて社内の説得からはじまり、次の半年でマッキントッシュDTPの立ち上げを行い、流れからCTPの導入を決定したという。「皆さんからよくデジタル化への対応やCTPの導入は不安がなかったのか、思い切りよくCTPの導入に踏み切りましたねとか言われるんです

が、正直なところあまり不安はなかったですね。CTPについては単純に考えればフィルムがプレートになっただけであって、後は基本的に何ら変わりがないですし、CTPそのものは約7年前から印刷業界に紹介されていたのですから、それほど新しい技術ではなく十分実用レ

ベルになっています」と導入当時を振り返る久保氏。

「デジタル化対応へ着手した当初からフルCTP化への構想はあったんですが、実は最初のシステム提案図にはCTPは小さく書いてあっただけで、デジタル化を進めて行くなか、CTPの版材の品質が向上したこともあって自然の流れでフルCTP化へと進んで行きました」としているが、実際の導入にあたってのポイントとしてはクオリティの追求も重要だと久保氏は強調する。同社としては、いわゆる多品種・小ロットの印刷は主たる商売として向かないと考えており、印刷業としてのプライドと印刷業として何が求められているかを追求して行った時に、デジタル化対応を前提とした高品質と品質の安定にたどりついたという。

「デジタル化と同時にこれまで外注に出していた部分を内製化したいという考えがありました。これは、仕事を大切にしていきたい、つまりクライアントからの信頼を得るためにきちんとした対応をするということなんです、これまであったトラブルというのは大抵の場合、弊社から外注に出した場合に発生している例が多く、社内だけで処理できた仕事に関し



同社のMacDTPルーム

てはほとんど問題がなかったということに起因しているんです。結局全てにおいて社内でも真剣に取り組まないと、高品質、品質の安定の実現は難しいということですね」

順調にデジタル化を進めてきた同社だが、当初から人材が揃っていたわけではない。特に、最初にマッキントッシュDTPを導入した際には、専門のインストラクターと契約し、社員1人当たり教育人件費だけで100万円以上はかけており、マッキントッシュのオペレーターには、あえて印刷を知らない人材を募集して担当にあたらせている。その理由について久保氏は「最初から従来の印刷工程、つまりアナログ工程を知ってしまっていると今のデジタルの流れになかなか対応できないのです。アナログの時はこうだったとか、デジタルで修正しないでアナログで修正しようとする傾向がどうしても出てしまいますので、それだけは絶対に避けたかったということがありました」

「アナログの際たるもののひとつがフィルムと言えますが、フィルムはストリップ修正や貼り込みなどが出来ますのでフルデジタル化の妨げになるんです。直しが出来るということは、どうしてもそれに頼る気持ちなどがどこかで出てしまうので、



広島本社社屋

100%デジタル化することによって常に完全データを用意せざるをえない状況にしていってしまうことが一番と考えています」としている。

また、CTP導入の際によく問題とされる色校正については「色校正の問題が理由で導入に踏み切れないという場合もあるかと思いますが、元々本紙校正そのものは印刷業が作った常識であって、クライアントが本当に望んで作った常識ではないと考えているのです。つまり、こちら側から作った常識なのであればこちら側から変えて行く必要があるのではないかと、厳密に言えば平台の校正機

にしたって、インクを使っているというだけで本刷りとは違う簡易校正なわけで、本紙校正の場合にしてもそのまま状態を維持してクライアントの了解をもらってから刷るなどというのはまず無理な話です。であるなら、デジタル時代に対応したカラープリンタでの出力を色校正としてクライアントに納

得してもらおう努力をするべきだと思いますし、弊社はそれを実践しています」との意見を持っており、業界としての対応を考えさせられるところである。

同社では今後の展開として通信環境の整備に力を入れて行くとしており、ネットワークを使ったコミュニケーションの推進を予定している。CTPシステムという一般的な程度規模の大きい印刷会社への導入が想像されるところだが、同社のような形態の企業が今後も登場してくる可能性は大いに考えられる。同社の今後の活躍が注目される。

SAKATA INX... Visual Communication Technology

CTPが未来だ!

CTPが実用化段階に入り、サーマルによる高精度、低コスト時代が到来しました。印刷をトータルに扱うサカタインクスならではの「ノウハウ」で、CTPも簡単に、安定した印刷システムの一部として、サポートいたします。

Go to CTP

INXオリジナルOPU/データベースサーバル PreDome 100

Kodak サーマル プリンティングプレート

サーマルモードによって高感度化が図られ、一般の商業印刷分野で使用できる高解像力、明度の取り扱い、高い耐刷力などの長所を備えています。

プレートライシシリーズは、830nmIR(赤外線)レーザーヘッドを採用し、サーマルプレートに1時間当たり10版以上の驚異的なスピードで高精度に出力できます。しかも様々な刷版サイズに対応できる柔軟性を備えています。高速・高精度・明室操作と三拍子揃ったニューモデルです。

■メリット
- 印刷時間の大幅短縮と生産性の向上

CREO PlateRite 3244MT

サカタインクス株式会社
印刷製版機材事業部
大阪本社 550-0002 大阪市西区江戸堀1-23-37 TEL 06-447-5855
東京本社 112-0004 東京都文京区後楽1-4-25(日教館ビル) TEL 03-5689-6640